

東北大学出版会 会報

第35号

宙

おおぞら

〒980-8577
仙台市青葉区片平2-1-1
TEL 022-214-2777
FAX 022-214-2778
www.tups.jp
info@tups.jp

2022年9月

自著を語る

α星

『ほんとうのことば』

戸島 貴代志



「海が牙を剥いた。」

「自然が伸びをした。」

あの「三・一一」での津波を経験した二人の漁師の言葉です。二人とも家も船も失った被災者でした。

家も船も失ったのだから「牙をむく」と言っても当然です。しかし他方、「自然が伸びをした」との言葉は少し別のニュアンスを感じさせます。さらに、ふと口を衝いて出たいずれの言葉にも、それぞれの語り手と海との平生の関わりがおのずと言外に語り出されているかのよう

にも思います。それぞれの言葉に、語り手と海との偽らざる関わりが、ひいては奥底での森羅万象との深い関わりが、おのずと滲み出ているかのようだという事です。ひとは、眼前の世界について語る前に、すでに自身の世界の中から語っているといってもよいでしょうか。ここでは語るの人は人ではなく、むしろ言葉が語っています。人によって語られた言葉がすでに当人の何たるかを——つまり当人の生きている世界を——おのずと語っているわけです。

一般に言葉は事柄を描写する道具つまりは記号とされています。たとえば「愛」について、語る言葉は「愛」という事柄を描写する記号です。ひとはしかし世界について語るとともに世界の中からも語っているのだとしたら、愛の中から語られる言葉もあるはずで、それは愛

を描写する記号というより、それじしん愛を宿した（愛ある言葉）、したがって語り手自身の人となりを如実に語る言葉となるでしょう。二〇世紀のフランスの哲学者、G・マルセルの言い方に倣うなら、人が自在に語る言葉は人の「所有」であり、その人自身を如実に語る言葉はその人の「存在」を宿しています。明晰・判明・正確・無謬、これが人によって「所有」された言葉のあるべき姿なら、いわば（遮るものの無さ）が人の「存在」を宿している言葉のあるべき姿ではないでしょうか。明晰判明であれ遮るものの無さであれ、嘘偽りのないまことの言葉、そのような視点からこの書『ほんとうのことは』は書かれました。

平安仏教を代表する一人である空海は、山川草木の世界がそのまま言葉であるとの独自の立場から、世界を大きく使う人は世界によって大きく使われる人でもあると考えました。その世界は特殊な言葉（いわゆる「真言」）からなり、人はいわばその意味での言葉の海に生れ落ちるわけです。また鎌倉仏教の代表者の一人である道元も、人と世界の真理をこう表現しています、水を大きく使わねば魚は魚として大きく働けず、魚を大きく使わねば水も水としては大きく働けない、と。真理は言語を超える

としつつ、その真理を彼はむしろこうして特殊な言語空間に落とし込むのです。空海も道元も、ことば（コトのハ）は事柄を表示する記号というよりも、それじしん事柄の一部（つまり事の端）として、人と世界とが働きあう一種の蝶番のようなものと考えています。

そうして働きあう人と世界とが、言葉を介してよりいっそう大きく働きあうには、しかしそのつど人も言葉もいわば一定の負荷に耐えねばなりません。言い換えるなら、人によって大きく語られる言葉にはすでにそれだけの負荷がかかっており、そのような言葉によって大きく語られる人もある種の負荷に耐えているということですから。あの「海が伸びをした」という言葉もそうであるように、だれもがそうした言葉を話せるわけではなく、話した人も常にそうであるわけではありません。しかしながら言葉が単に人の道具つまり「所有」に尽きるなら、人も人を道具としつつみずからも道具と化すでしょう。大きな世界の中から大きく語られる仕方、語る人自身を豊かに語る「ほんとうのことは」、人の「存在」を宿すそのような言葉の可能性に、本書がいくらかでも寄与できていれば幸いです。

英文タイトル 'Breathing True' は、言葉が呼吸に似て

いることをほのめかしています。深く大きな呼吸がときに人には必要であるように、深く大きな言葉が人には不可欠であるように思います。

(としま きよし・東北大学大学院文学研究科教授、
専門・哲学・一九九二年京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学)

人文社会科学ライブラリー 〈第5巻〉

ほんとうのことば

戸島貴代志 著



自覚、出自、時間、身体：それらと言葉の交錯の中で生まれる私たちを成すものを探り、自己の根底を知る手がかりを論じる。

四六判・二三四頁・定価二七五〇円(税込)



β星

「終わりのない対話」から
生まれる研究

結城 武延

私は経済学部にも所属し、日本経済史・経営史を研究教育しています。しかし、経済史・経営史の専門家は経済学部だけでなく文学部、経営学部、商学部等々、さまざまな学部にも所属しています。これは、まさに経済史・経営史という分野が多様な領域を架橋した学際領域であることを反映しています。E・H・カーは「歴史とは、歴史家とその事実のあいだの相互作用の絶えまないプロセスであり、現在と過去のあいだの終わりのない対話」「歴史とは何か」と述べました。経済史・経営史はさらに「帰納と演繹のあいだの相互作用の絶えまないプロセスであり、歴史学と社会科学のあいだの終わりのない対話」を付け加える必要があるといえるでしょう。それはなぜでしょうか。

経済史・経営史は経済や経営の歴史を叙述する学問ですが、その構成に特徴があります。歴史学は厳密な史料批判に基づいた帰納的論証によって歴史叙述を行う学問

である一方で、経済学（理論）は経済主体に関する一定の仮定の下で、演繹的推論によって社会現象のメカニズムを説明する学問です。そして、経済史・経営史研究は経済・経営理論を参照点とする仮説を史料から帰納的に実証するという、理論と歴史学の間接的な補完関係の上に成り立っています。これが先の問いに対する答えになります。

私の研究を事例として具体的に説明してみましよう。マクロ経済学者との共同研究で、関東大震災における株式市場の動向を分析し、当時の株式市場では被災や復興状況を的確に反映して株価が形成されていたことを明らかにした研究があります（「関東大震災と株式市場―日次・個別銘柄データによる分析―」（鈴木史馬氏と共著『経営史学』に掲載予定）。この論文では、誰も予期しない大規模災害を受けた株式市場で株価がどのような影響を受けるのかという資産価格形成の理論を分析枠組みとして、株価の動きを統計的に検証しています。検証の結果、震災に株価が大きな影響を受けた企業を抽出し、株価の変動要因を企業資料から説明しています。関東大震災が経済・経営に与えた影響は甚大かつ広範囲に及び、被災状況は当時の新聞や雑誌等で大量に記録されまし

た。その膨大な被災情報を経済理論と統計的分析で精査したことによって、個別企業に与えた影響を明確に示せたのです。関東大震災で最も被災を受けた東京市と横浜市が急速に復興し、数年後には震災前よりも工業生産が増加したことは先行研究で明らかになっていますが、この歴史的事実の背景に、資金面でサポートした強靱な株式市場の存在を発見しました。大震災時の株式市場を分析する経済理論と当時の新聞・雑誌及び企業資料の歴史学的実証の対話によって、はじめてこの事実が明らかになったのです。

こうした経済史・経営史における歴史学と経済・経営理論の対話の程度は国によって大きく異なります。経済学・経営学の制度化が進んでいるアメリカでは、理論的な枠組みの明確化と統計学的な分析手法が求められており、経済史の応用経済学化が進んでいます。他方、日本では、理論の流行に左右されることなく、厳密な史料批判を前提とした伝統的な実証主義的歴史学を基盤としています。近年では、私以外の経済史・経営史研究者も経済学者や経営学者との共同研究を精力的に行っていますし、日本経済学会の年次大会では歴史セッションがあり、

経済史・経営史の専門家と経済学者との対話も進みつつあります。多様な歴史研究を認めながらも、社会科学者との対話も進めている現在の状況は、日本の経済史・経営史研究が国際的に類を見ない発展をする可能性を秘めています。

(ゆうき たけのぶ・東北大学大学院経済学研究科准教授、専門・日本経済史・経営史、二〇一四年東京大学大学院経済学研究科博士後期課程修了)

今を生きる

東日本大震災から明日へ！
復興と再生への提言



- 1 人間として 座小田豊・尾崎宏編
- 2 教育と文化 水原克敏・関内隆編
- 3 法と経済 稲葉馨・高田敏文編
- 4 医療と福祉 久道茂・鴨池治編
- 5 自然と科学 吉野博・日野正輝編

A5判・各巻二〇〇円(税込)



γ星

大学教員について考える

野地智法

博士の学位を取得した後の八年間、私は日米二か所の大学で、ポスドクとして研究活動に明け暮れました。日々、研究のことだけを考え、充実した時間を過ごしていた当時の自分は、米国での永住の機会を模索し、グリーンカードを取得する準備をしていました。そんな自分は、今から九年前の三六歳になった年に、アメリカ生活に別れを告げ、母校で教鞭をとるべく、学生時代に慣れ親しんだ雨宮キャンパス(旧農学研究科)で働くことを目指しました。恩師(山口高弘先生)のご厚情により、内地留学生として東京大学医科学研究所で研鑽を積み機会を与えて頂いたこともあり、ポスドク時代を含めた計十一年間は、農学領域ではなく医学領域で過ごしました。自分の専門は、機能形態学と粘膜免疫学。似ても似つかぬ二つの学問を融合させたサイエンスの魅力に夢中になり、それを農学領域の中での学問体系として確立することを目標とし、三六歳だった年に医学領域に別れを告げ、

東北大学農学研究科の教員選考に応募しました。採用して頂いて以降、九年間ただひたすら走り続け、今年が大学教員になって十年目の節目の年となりました。昨年度からは、研究室（ラボ）を主宰する機会を与えて頂き、四四歳になった年に、大学教員として大きな責任を持つ立場となりました。

私の人生にとっても大きな影響を与えて下さった、恩師の清野宏先生が牽引された粘膜免疫学に惹かれ、二五歳の時に清野研究室の門を叩き、それ以後、粘膜組織に発達する免疫機能を解析することに夢中になりました。その時から数えて二〇年、大学教員として残された時間（二〇年）の中間地点にいることに気付き、大学教員としては若輩者ながら、「宙」に寄稿するお誘いをお引き受けいたしました。農学研究科に赴任した際に目標とした、機能形態学と粘膜免疫学を融合した農学研究の学問的地位を確立することについては、論文発表等を通して、私達の研究成果が農学領域に属する先生方の目に触れる機会も増えてきたと感じます。これからの二〇年間、研究成果の社会実装を目指した応用課題として発展させることが、大学の研究者としての大きな目標であることは言うまでもなく、特に産業界から注目される研究成果を

広く発信したいと考えます。

大学に所属する教員の研究者としての最大の魅力は、研究活動を通して、教育活動にも携われることと考えます。ラボに来れば若い活気に溢れている、そんな充実した場を、研究というツールを通して学生に提供することを目標とし、日々奮闘しています。二〇年前に、私が大学院生として所属した清野研究室は、まさにそのような場でした。当時の恩師が、どのようにラボを設計したのか、今の立場で恩師が語って下さる話を聞くことが、私にとつての最高の贅沢と感じています。当時、恩師の描いたサイエンスに自分は夢中になり、毎日ラボで実験ができる喜びに浸り、夜遅くまでラボで仲間と過ごしていたことが、昨日のことに思い出されます。

解無き問いを追求する研究活動は、試練との戦いの連続です。ましてや、その戦いの中で人材育成を目的とした教育を行うわけですので、学生の充実度・満足度が研究活動を通して向上しない限り、ラボの発展もあり得ません。大学でラボを主宰する者にとって、研究活動と教育活動の双方の成功が絶対である一方で、ラボ運営の参考となる学術書を探すことは容易ではありません。事実、大半のラボは、主宰者の暗黙知により運営されており、

そのノウハウを形式知にすることを目的とした高等教育研究は皆無である事実にも気付きました。これが大学の面白さでもあり、一方で、現代の大学を取り巻く様々な問題の中で、ラボの研究・教育活動の発展に資する現代型（もしくは近未来型）のラボ運営について、人文・社会学的視点も取り入れ考えていくことが、ラボ主宰者として重要であると感じています。

（のち ともりの・東北大学大学院農学研究科教授、東北大学高度教養教育・学生支援機構教授（兼）、機能形態学・粘膜炎疫学、二〇〇五年東北大学農学研究科博士後期課程修了）

農学生命科学を 学ぶための 入門生物学〈改訂版〉

鳥山欽哉 編

B5判・二三八頁・三〇八〇円



私の本棚



8星
本が重さをもったモノでも
あるということ

五十嵐 太郎

二〇二二年三月一六日の深夜に発生した大地震は、激しく建物が揺れ、怖い体験をしたが、二つの本棚が倒れ、宿舍の二部屋の床に大量の本が散乱した。実は同年の二月にやはり地震によって、これらの本棚が転倒しており、だいぶ片づけていたのが、すべて無駄になったので、心理的なダメージは小さくない。ちなみに、二〇一一年も、三月一日と四月七日の宮城県沖の地震によって、少し整理を終えたばかりの本棚が再び倒れてしまったから、その反復である。宿舍にはほかにもいくつかの本棚はあるが、いつも豪快に倒れたのは、同じ二つの本棚だった。これらはネットで購入した組み立て式のスチール製であり、教訓としては安物は買わない方がいいということだろう。ともあれ、四回も足の踏み場がないほど、本が散乱すると、本も痛むが、心も痛む。山頂に巨石を押し上げて、もう一息のところまで谷底に転がってしまい、同

じ行為を永久に繰り返す、シジフォスの心境に思いをはせたくなる。また繰り返すのではないかと考えると、片づけが億劫になる。

筆者の研究室が入っていた東北大学都市・建築学専攻の建物が、東日本大震災によって大破し、立ち入り禁止になったときも大変だった。解体工事に着手する前、一時的に補強し、入室可能になったタイミングになんとか蔵書をレスキューできたが、当初は絶望的な気分になった。エンジニアリング系の先生は、アマゾンで同じ本を買えばいいのでは、と述べていたが、建築史の資料となる本、建築・都市論、作品集などは、いつでもどこでもまた簡単に購入できるものではない。二度と会えない貴重な古書もあり、リュックやバッグに本を詰めて、その重みを感じながら、研究室と仮置場のあいだを何度も往復するしかなかった。しかし、いずれ本はすべて電子化されるかもしれない。そういう時代を迎えれば、蔵書をレスキューしなくても良くなるのだろうか。本がただの文字情報ならば、確かにその可能性はある。が、建築やデザインの本は、しばしば大型のサイズをもち、見開きでヴィジュアルを伝える。この読書体験は、やはり大型のスクリーンを眺めるのとは違う。

またあえて巨大な辞書風にした作品集+建築・都市論にしたレム・コールハースの『S.M.L.XI』（一九九五）年/ただし、邦訳版は図版をすべてなくし、XSサイズの文庫本が選択された)のように、ブックデザインがメッセージをともなったり、凝った装幀であることも少なくない。つまり、本はモノなのである。そこで筆者は、期間限定の教育プログラム、せんだいスクール・オブ・デザイン(二〇一〇―一五年)において、雑誌をつくるメディア軸のスタジオを担当した際、実験的なとりくみを行った。通常、こうした企画は執筆する内容の指導のみだが、特集テーマにあわせた前衛的な装幀デザインも、同時に受講者と模索したのである。例えば、第1号は、右から開くと、縦書きの「ウェブの時代に紙の媒体ができること」のレクチャー・シリーズ、左から開くと、最後まで横書きのテキストで仙台的「書店空間のフィールドワーク」のコンテンツが展開する。実は小口までの長さを一枚ごとにズラすことで可能になる特殊製本だが、この面白さは紙のメディアでしか体験できない。

『S-meme』と命名した雑誌では、仙台的製本業者とコラボレーションを行い、ほかにも独自の袋とじ製本によって不可逆的な読書体験となる2号(特集Ⅱ文化被

災)、大きな表紙が本体をラッピングする3号(シヨックピング)、全ページがばらばらのチラシを束ねたような6号(演劇・ライブ)、リング状につながる蛇腹製本によって表裏をえいやっとひっくり返せる7号(仙台文学)、細長いページが街区の模型に変わる8号(仙台建築ガイド)などを実現している。こうしたデザインが建築の設計と似ていることに気づいたのは大きな収穫だった。

グラフィック・デザイナーの松田行正も、「オブジェとしての本」をテーマに掲げ、自身の出版社からユニークな本を世に送りだしており、毎年楽しみにしている。昔は本がモノであることは自明過ぎて意識されなかったかもしれない。だが、電子化の普及によって、逆説的に本の特徴のひとつがモノであるということがわかりやすくなった。本を手元に置いて、所有したくなるのには、デザインも重要である。

(いがらし たろう・東北大学大学院工学研究科教授
専門・都市・建築理論)



星

帰郷―「若手研究者出版助成」から
回帰すべき原点

桐原健真

初めて行く研究会などで投げかけられる「専門はなんですか」という問いは、しばしば私を困らせる。そうした問いに対し、自分の受けた教育履歴に基づいて「日本思想史です」と言うと、おおむね「よくわからないなあ」という顔をされるからである。それは日本思想史という学問がメジャーではない結果でもある。

日本における文系の学問には、伝統的に「哲史文」(哲学・史学・文学)というカテゴリーがあり、言語ごとに棲み分けがなされている。例えば中国語なら中国哲学・中国史・中国文学であり、ドイツ語ならドイツ哲学・ドイツ史・ドイツ文学となる。しかし、こと日本語に関して、「史」「文」(日本史・日本文学)はあるものの、「哲」にあたる学問領域は明確ではない。

個人的には、日本思想史がその「哲」に相当する学問だと考えているが、如何せんその知名度は高くない。それゆえしばしば「日本の文化史をやっています」などと

通りの良い表現で説明することとなるのだが、内心では少なからず居心地の悪さを覚えたりもしている。

そのうえで、「(具体的に)何を研究しているのか」と問われると、「(思想家の)誰を取り上げているのか」と問われると、これもまた私を困らせることとなる。むしろ研究者生活も人生の半分を越えてきている人間が、なにかの「専門家」でないというのは、普通は考えがたい。しかし私は自分が専門にしているものを的確に表現することが非常に不得手なのである。

東北大学出版会の若手出版助成で刊行して戴いたものが『吉田松陰の思想と行動——幕末日本における自他認識の転回』(以下『思想と行動』)というものであったため、講演などの際には、「吉田松陰の専門家」と紹介されることが多い。その意味では、「吉田松陰を専門としている」と名乗れば良いのだろうが、しかし自分が松陰について「専門家」と言えるほどの人間なのかという感覚の方が強い。

松陰研究者には、松陰の生き様に惚れ込んだ人間が少なくない。確かに、ペリー艦隊への密航に失敗して幽囚の身となるも、松下村塾では多くの後進を育て、ついに安政の大獄で落命した彼の生涯は、人々を惹き付けるも

のがある。

しかし拙著『思想と行動』の松陰は、精緻な思想体系を構築したり、あるいは同時代に大きな影響を与えたりしたようないわゆる頂点思想家ではなく、むしろ幕末日本における地方在住の一知識人として描かれている。本書は、そうした松陰が、いかに同時代の日本と世界をみていたのかを問うたのであり、その限りで一般の松陰研究とはずいぶん異なっていた。私にとって、「吉田松陰の思想と行動」の検討は、「幕末日本における自他認識の転回」を明らかにする方法であって、目的ではなかったのである。そうしたことが、私をして「松陰の専門家」という名乗りを避けさせる所以であるとも言える。

また近年私を取り組んでいるのは、近代日本の死生観や翻訳語をめぐる言説史、あるいは日本における超越性の問題——と非常に落ち着きがない。その意味でも、自分が松陰を専門にしているとは言いがたい状況にあるのだ。

それでは松陰から私が多分離れてしまったのかというと、実はそうでもない。一九世紀以降の日本人の思想を考えると、松陰というかなり特殊な人間について研究したという経験は、私にとって常に一つの軸となっ

ている。数年前に洪沢栄一を取り上げた際にも、洪沢の儒学や宗教に対する認識を検討するにあたって、松陰は参照されるべき試金石であった。

学位論文を基にした『思想と行動』が刊行されて今年で一三年となる。その間、松陰は私の研究における基準点の一つであり、またこの本こそが回帰すべき研究上の原点であったことは疑いない。

(きりはら けんしん・金城学院大学文学部教授、専門・日本思想史、二〇〇四年東北大学大学院文学研究科博士課程後期三年の課程修了)

人文社会科学の未来へ

—東北大学文学部の実践—



東北大学文学部編
東北大学文学部で学べる
二六の学問分野について、
担当教官自らがその奥深
さや魅力を紹介する。人
文社会科学の未来を担う
人への一冊。

A5判・四〇八頁・三三〇〇円(税込)



と星

書評
刊行

堀勝義著 東北大学出版会 二〇一九年二月

『がんの治療を阻む生体のしくみ』

谷内一彦

がんは、我が国において日本人の死因の第一位で、年間三〇万人以上の国民ががんで亡くなっている。日本人の三人に一人ががんで死亡しているとも言われている。生活習慣の欧米化等に伴い、これまで多かった胃がん、子宮がんが減少し、それに代わって乳がん、大腸がん、肺がんなどが増加している。一生涯のうち何らかのがんになる割合は高く、日本人男性の二人に一人、女性の三人に一人ががんになるとも言われている。現在行われているがんの治療法には、主に、手術療法、放射線療法、化学療法（抗がん剤）、免疫療法の四つがあり、化学療法、放射線療法、免疫療法が進歩し、がんの種類や病期によっては手術と変わらない効果が認められるようになってきた。

著者は一九八〇年から二〇一四年までがんの基礎研究

を東北大学において活発に行ってきた研究者である。著者は抗酸菌病研究所（現加齢医学研究所）に所属して、がん研究の先駆者である吉田富三先生が開発した「吉田腹水肝癌」を用いて長くがん研究を行ってきた。福島県浅川町出身の吉田富三先生（一九〇三—一九七三）は東北大学病理学の教授でもあった時期がある。吉田富三先生は「吉田腹水肝癌」を開発してがんの本態を明らかにし、がん化学療法薬ナイトロミンを開発して化学療法への道も切り拓いた先駆者として一九五九年に文化勲章を受章されている。著者らの研究グループは吉田富三先生の研究の後継者であり、国内外でその基礎研究が高く評価されてきた東北大学を代表する研究である。同じ研究グループの佐藤春郎（さとうはるお）名誉教授は「吉田腹水肝癌を用いたがん細胞の生物学研究において優れた業績を挙げ、また広く癌研究の発展に寄与した」として吉田富三賞を一九九五年に受賞している。

彼らの代表的業績に腫瘍血流や腫瘍血管の特異性がある。著者らの研究業績に基づいて開発された化学療法の一つである「がんの兵糧攻め」は、彼らが心血を注いだ低分子化合物コンプレタスタチンは臨床では使用できなかった。しかしその概念である腫瘍血管遮断は米国を中

心に開発された抗体医薬ベバシズマブとして臨床に一般的に用いられている。ベバシズマブは結腸・直腸がん、非小細胞肺癌、腎臓がん、脳腫瘍、卵巣がん、子宮頸がんの治療に使用され、腫瘍に栄養を与える新しい血管の成長を防ぎ、腫瘍の成長を止める働きがあり、癌の化学療法の一つとしてがん患者の生存率向上に役立っている。ベバシズマブは血管内皮細胞増殖因子（VEGF）阻害のモノクローナル抗体で、高分子のために薬価が非常に高額である。米国では、転移性乳癌の患者が支払う代金は年間八万八〇〇〇ドル（約一一〇〇万円）以上であるという。著者らは腫瘍血流遮断と抗血管新生作用を区別しており、腫瘍血流遮断作用のある低分子化合物には将来性が残っている。

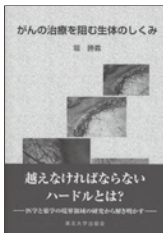
私の知り合いである山浦玄嗣先生（ケセン語の提唱者として有名）や窪田和雄先生（南東北病院・一般財団法人脳神経疾患研究所）との関連で、著者が行った放射線照射後の腫瘍血流遮断の併用効果増強に関して興味を持って読ませていただいた。手術療法、放射線療法、化学療法、免疫療法を組み合わせた治療をがんの集学的治療と呼び、より大きな治療効果が期待できる。素晴らしい研究業績を東北大学出版会から出版することは今まで

の研究業績を若い研究者に紹介して更なる発展を図るために重要である。若い研究者に本書を一読していただき、長年にわたり多くの研究者が心血を注いできたがんの撲滅に向けた基礎研究をどのように考えて遂行してきたか理解していただきたい。常にその時代の若い研究者が新しいイノベーションを起こしてきた。がん研究以外にもこのような研究業績は多くあるので、東北大学出版会からの出版を契機に研究業績の継続が可能である。

(やない かずひこ・東北大学名誉教授、薬理学・分子イメージング、一九八六年東北大学大学院医学研究科博士課程修了)

がんの治療を阻む生体のしくみ

堀 勝義 著



医学と薬学の境界領域から解き明かす、がん治療のために越えなければならぬハードルとは? 徹底した病態生理研究の成果。

A5判・二四二頁・四九五〇円(税込)

出版会だより

7 星 「出版会議」 雑感

成 瀬 幸 典

東北大学片平キャンパスの北門からキャンパス内に入り、右手に材料科学高等研究所(AIMR)の建物を見ながらしばらく歩いて、知の館(TOKYO ELECTRON House of Creativity)の手前を右手に曲がり、少し進むと左手に木造の古い平屋の建物がある。「旧仙台医学専門学校博物館・理化学教室」、東北大学出版会が入っている建物である。便利になったもので、Googleマップのストリートビュー機能を使用すれば、建物の外観を、東北大学出版会の看板を含め、はっきりと見ることができ(写真自体は少し古いようであるが)。向い側に立つAIMRの五階建てのラボ棟の現代的な外構えと比べ、出版会の建物は前時代的な佇まいであり、また、ラボ棟に見下ろされ、圧迫されているようにも見えるが、学と知の担い手として百年以上にわたって歩んできた東北大学を支え続けた建物にしか備わりえない風格と矜持を湛えているように感じられて、私はこの建物のドアを開けて、

出版会の出版会議に出席するのが好きだった。

私が出版会議に参加するようになったのは二〇一八年の四月からである。出版会の理事であり、退職を間近に控えておられた稲葉馨法学研究科教授から、理事にどうかというお話があり、務まるか不安はあったが、出版事業の実態を覗いてみたいという思いもあり、引き受けることにした。新型コロナウイルス感染症が拡大する前、出版会議は、原則として、毎月第一月曜日の午後六時から開催されていた。毎回、出席者に若干の変動はあったが、久道茂理事長をはじめとして十名前後がさほど広がらない部屋に集まり、活発に意見交換を行っていた。新参者で、若輩の私は、他の理事の方々の意見を聞くことに徹することが多かった。特に、水原克敏理事、尾崎彰宏理事、佐倉由泰理事の学術図書あるいはその出版の担い手としての大学出版会に関する理念を基礎にした熱い議論、伊藤房雄理事や成田由加里理事の理知的で透徹した意見、出版会事務局長小林直之氏の編集者の観点からの的確な提案など、感銘を受けることが多かった。二〇一八年に法学研究科副研究科長、二〇一九年からは同研究科長を務めることになった私としては、日々の行政的な仕事から放たれ、大学人としての自己を再認識で

きる貴重な時間であり、出版会の建物が湛える前記の雰囲気と相まって、出版会議に出席するのがとても楽しみだった。ただ、出版会の運営にとれだけ貢献できたのか、全く自信はないが。

しかし、新型コロナウイルス感染症は出版会議の開催方法にも影響を及ぼさずにはいなかった。同感染症の拡大により、二〇二〇年四月の出版会議は中止され、五月は書面会議となった。そして、同年六月からはオンライン形式での開催となり、現在に至っている。個人的には、オンライン形式での会議には物足りなさを感じている。画面越しに見る理事の方々の様子は、一見、これまでと変わりがないように思えるが、発言の一言一言に籠る温度や湿度、共感した人から発せられる温かな雰囲気、「敢えて一言」と決意した人が発する言葉の鋭さと緊張のようなものが感じられないからだと思う。画面を通してみる様子、スピーカーを通して聴く言葉は、その人の人格の発露としての「姿勢」や「声」ではなく、「映像」であり、「音」ではないかと感じる。たしかに、オンライン形式でも、必要な情報を共有し、一定の意思決定を行うことは可能であろう。また、遠隔地からも参加できるなど、オンライン会議の長所も少なくない。実際、昨年

度の出版会の業績は堅調なようで、私が覚えている感覚は、経営面から見れば単なる感傷に過ぎないのかもしれない。しかし、「熱き心と冷静な理性・知性」を兼ね備えた者が良き法曹であるように、出版に対する熱意と冷静な経営判断を行える生の会議体こそ、読者の心に響く良書を社会に送り出せるのだと信じたい。そう思いながら、対面式の出版会議に戻る日を待ち望んでいる。

(なるせ ゆきのり・東北大学大学院法学研究科教授)

東北大学災害科学国際研究所編

東日本大震災からのスタート

災害を考える51のアプローチ

B5判・二三四頁・三三〇〇円(税込)

科研費による出版を承ります

科学研究費助成事業の「研究成果公開促進費(学術図書)」を利用した出版をご検討の際は、ぜひ小会事務局までお声かけ下さい。「見積書」「発行部数積算書」等の作成を承ります。

(実編例)

★平成三〇年度

西田文信著 『ナムイ語文法の記述言語学的研究』

高橋美能著 『多文化共生社会の構築と大学教育』

高橋秀太郎・森岡卓司編 『一九四〇年代の〈東北〉表象

―文学・文化運動・地方雑誌―

★平成一九年度

尾園絢一著 『パーニコが言及するヴェーダ語形の研究

―重複語幹動詞を中心に―

学術出版をお考えのみなさまへ

専門書、教科書、教養書、入門書、学会へのプロシードイングスなどの出版をご希望の方は、ぜひ小会宛にご連絡ください(連絡先は表紙面参照)。日本学術振興会科学研究費補助金や東北大学若手研究者出版助成の申請などを含め、ご相談を承ります。

宙（おおぞら）の七つの星の座に、また新たに、本と學術をめぐることばの光、光のことばが集い、三十五回目を、かけがえのない一期一会を重ねることができました。御執筆くださったみなさま、ありがとうございます。

一九九六年一月三〇日に設立された東北大学出版会の会報の名が「宙」に決まったのは、翌年の一月二〇日の第二回理事会でのことです。その二か月後の一九九七年三月の創刊以来、「宙」は、はじめの九年ほどは年に二号を、ここ十数年は年に一号を通例として発行されてきました。本会のホームページには、創刊号からの、執筆者とタイトルの一覧が掲載されていますが、その記載から、本会が「宙」とともに歩んできた軌跡をうかがうことができます。本会の創立時に仙台にいなかつた私のような身には、こうした歳月を顧みることがとりわけたいせつになります。

そして、会報の名を「宙」として、そこに北斗七星にちなんだ七つのことばの座を用意した企図の遠大さ、周到さには感銘を超えて驚嘆すら覚えます。「宙」ということばには、本会の創立を支えた理想と熱意が籠もっていると思います。

本号の α 星の戸島貴代志氏のことばは、「深く大きな呼吸がときに人には必要であるように、深く大きな言葉が人には不可欠であるように思います」という印象深い一文で結ばれています。「宙」もそうした「深く大きな言葉」です。難事の多い今、無理にがんばろうとすると、呼吸は浅くなりがちです。そうした渦中にこそ、「宙」ということばに込められた理想を思い、深く大きな呼吸をして、深く大きなことばを具えた本を世に送り出したいと思えます。これからも、みなさまのたいせつな思考の成果の結晶としての出版の企画をお寄せください。お待ちしております。（佐倉由泰）

宙

（おおぞら）に輝く北斗の七つの星に寄せて、

東北大学出版会が読書人に贈るエッセー

第三十五集

内

容

α 星

自著を語る『ほんとうのことば』／戸島貴代志（東北大学大学院文学研究科教授）

β 星

「終わりのない対話」から生まれる研究／結城武延（東北大学大学院経済学研究科准教授）

γ 星

大学教員について考える／野地智法（東北大学大学院農学研究科教授）

δ 星

私の本棚／本が重さをもったモノでもあるということ／五十嵐太郎（東北大学大学院工学研究科教授）

ϵ 星

帰郷―「若手研究者出版助成」から／「回帰すべき原点」／桐原健真（金城学院大学文学部教授）

ζ 星

書評・堀勝義著・東北大学出版会二〇一九年二月刊行『がんの治療を阻む生体のしくみ』／谷内一彦（東北大学名誉教授）

η 星

東北大学出版会だより35／「出版会議」雑感／成瀬幸典（東北大学大学院法学研究科教授）